

疏水フォーラム in いんばぬま2012

～疏水開削の情熱を今ふたたび～

フォーラム会場前ロビーの疏水パネル展示風景



全国の疏水百選のパネル展示



千葉県内のパネル展示

平成24年10月19日（金）佐倉市ユーカリが丘ウイシュトンホテルユーカリにおいて、全国から疏水ネットワーク会員及び関東近県や千葉県内の改良区，行政機関，印旛沼流域の住民など250名余りが出席して開催された。

主催：水土里ネット印旛沼，疏水ネットワーク，全国水土里ネット

共催：（独）水資源機構千葉用水総合管理所，水土里ネット千葉，印旛沼流域水環境健全化会議，印旛沼地区農業農村整備事業推進協議会，千葉県印旛沼都市土地改良協議会

協賛：農林水産省関東農政局

後援：千葉県，印旛沼流域13市町，読売新聞東京本社千葉支社，（株）千葉日報社，山万（株），（株）広域高速ネット二九六，JFS スチール（株）

- 司 会 NPO 印旛沼流域環境研究会の園原悦子氏
- 開会宣言 疏水ネットワーク副会長
（水土里ネットやまなし 石川幸三 専務理事）
- 会長挨拶 疏水ネットワーク会長
（水土里ネット印旛沼 清水豊勝 理事長）



司会者

フォーラム開催の準備をしていただいた準備委員会と共催，協賛，後援をいただいた関係各位に御礼を述べ，平成24年度は，疏水フォーラムを水土里ネットが主体となり開催する最初のフォーラムであり，ご講演をいただくだけでなく，講演や報告をいただく講師の皆さんとの意見交換を企画したので，積極的な意見交換をして欲しい。と挨拶した。



副会長の開会宣言



会長挨拶

来賓 歓迎の挨拶

蕨和夫佐倉市長から、印旛沼流域13市町を代表して歓迎の挨拶をいただいた。

佐倉市は、都心から40km、成田空港から15kmに位置し、印旛沼という水利に恵まれ、古くから農耕あるいは漁業などが営まれてきた。中世以来軍事上、経済上の要衝地として栄え、江戸時代は江戸の東の要の地として徳川家康の側近により佐倉城並びに城下町が築城されました。

印旛沼の歴史は、自然との闘いで江戸時代には庄屋が莫大な費用をかけ干拓事業に挑み、戦後ようやく近代技術の導入により現在使用している用排水設備の完成を見ました。その後、40年以上経過し老朽化が進んできたため、平成22年度から「国営流域水質保全機能増進事業」が全国で初めて実施されています。

印旛沼は、私たちの生活や国土を潤す「水の道」ですが現在、混住化が進み、多くの疏水が抱える共通の問題を抱えています。

疏水は、農業生産を支えるだけでなく、地域の生活用水や地域住民の憩いと安らぎの場、あるいは動植物の生息空間となるなど多面的機能を発揮しており、農家だけでなく国民共有の貴重な財産です。

この疏水を良好な状態で維持していくために、農家のみならず地域及び都市住民をも含めた国民全体で疏水の保全活動に取り組み、次世代に継承していくことが求められていますので、このフォーラムを通じて疏水にかかわる土地改良区はもとより行政や関係者が連携し、疏水を巡る現状と将来について改めて関心を持っていただきたい。

「印旛沼」の書は、蕨佐倉市長が、フォーラムの開催を歓迎して「印旛沼の歴史のすこさ、そして美しさを表現した」ものです。



蕨市長挨拶



蕨市長が書いた「印旛沼」

来賓 フォーラム開催の祝辞

関東農政局狩俣茂雄次長から、フォーラム開催の祝辞をいただいた。

フォーラム開催の準備に当たった関係各位と参加者に敬意を表していただき、疏水の持つ機能を広く国民に知ってもらうこと、疏水を多くの人の手で守って行くことが可能になるように、情報の交換や発信をしていくことが、このフォーラムの目的と聞いております。と述べられました。



狩俣次長

そして、農林水産省は、戦後、昭和21年の食糧増産あるいは雇用の創出を目的とした「国营印旛沼手賀沼干拓事業」に着手し、その後計画を見直して「水資源開発公団」に継承し昭和44年に完成した。その後40年がたち施設の老朽化が目立ち、平成22年に「国营印旛沼二期事業」に着手しまして、地域農業の安定や印旛沼を含む疏水の水質の保全に寄与していきたい。

本フォーラムでは、印旛沼の歴史、地域の取り組みなどを疏水ネットワークの会員を始め多くの方に知っていただくよい機会になると思っておりますので、これらの活動を参考にこれからの皆様の活動に役立てていただければと思っております。

このフォーラムが実り多きものになりますようご期待するとともに参加者のご活躍、そしてフォーラムが盛会でありますことを祈念します。

印旛沼開発の語り部

郷土歴史作家の小林千代美氏は、先人の印旛沼開発の苦悩について「氾濫する印旛沼との血みどろの闘い」を自らが描いた「絵画」を用いて丁寧に語った。

戦国時代、徳川家康は、豊臣秀吉より関八州を与えられ、利根川の東遷を治水に有能であった伊奈忠次に命じた。この東遷で江戸は洪水から逃れられたが印旛沼は遊水池となってしまう、以後300年にわたる印旛沼の洪水との闘いが始まった。洪水は、江戸、明治、昭和の各時代に3～4年に1度ぐらいの割合で起こっている。洪水は、北の日光の方からやってきた「日光水」で、何の前ぶれもなく突如としてやってきて印旛沼は暴れ、沼の周りや新川べりの農家の人たちを苦しめた。

昭和41年に大和田排水機場が完成して、印旛沼の周りや新川べりの田に稲が豊に稔っています。人の力は、印旛沼を変え、農業用水、工業用水、生活用水などに活用され千葉県民の生活に潤いを与え続けています。人の力は人々の幸せのために印旛沼を生かしたのです。



語り部 小林氏

基調講演 疏水昨日、今日、明日

全国農村振興技術連盟委員長の太田信介氏は、基調講演で、疏水百選地区に選定された印旛沼と農業者を含めた地域住民がこれから疏水（印旛沼）とどのように関わり合っていくべきかについて、21世紀創造運動の取り組みや農地・水・保全対策事業の取り組み、そして郷里である滋賀県の実例を紹介するなど幅広い情報を紹介するとともに、会場からの発言を交えながらの基調講演であった。



参加者と対談をする太田氏

講演 恵みの沼に向けた新たな挑戦

印旛沼流域水循環健全化会議委員長の虫明功臣氏の講演は、印旛沼の歴史を考えると「恵みの沼」ではなさそうですが、印旛沼開発事業が行われてやっと「恵みの沼」にしようという新たな挑戦が始まったと理解すべきである。その新たな挑戦の中で「流域水循環健全化」を考え、印旛沼の抱えている課題等の解決には健全化の事務局を県がやっているから県がやってくれると思う人がいるが、やはり自治体がやる気を出さなければいけないと痛切に感じている。と自治体の奮起を促した。



水循環健全化を講演する
虫明氏

事例報告

(特)水資源機構千葉用水総合管理所長の吉岡敏幸氏の事例報告は、印旛沼開発事業と「印旛沼疎水」の必要性とその効果について、また、洪水排水機能である大和田排水機場の施設管理及び運転管理の取り組みの報告が行われた。



印旛沼の施設管理の
報告をする吉岡氏

活動報告

環境パートナーシップちば代表桑波田和子氏の活動は、環境活動見本市、コメメッセ in ちばなどを開催するなど、県と市民と企業と大学と一緒に取り組んでいる。そして、印旛沼下流水路の疎水下流部（花見川）と上流の新川における取り組みである。今回は、印旛沼の飲み水としての活動を頭に入れて流域で展開してる印旛沼の環境保全の具体的な取り組みについての報告であった。なお、桑波田氏は、印旛沼水循環健全化会議や印旛沼の環境フォーラムなどの開催についても携わっている。



花見川の活動報告をする
桑波田氏

情報交換会

座長は、東京農業大学教授の林良博先生。話題提供者は、基調講演の太田信介氏、講演の虫明功臣氏、農林水産省関東農政局印旛沼二期農業水利事業所長及川和彦氏、事例報告の桑波田和子氏、印旛沼土地改良区理事長清水豊勝氏の5名。

座長は、冒頭、印旛沼の意義、歴史、現状、更には、印旛沼における取り組みなど、幅広い観点からのご講演・ご報告をいただいたが、印旛沼が百選に選ばれた理由について簡単に触れますと「徳川幕府により東京湾に注いでいた利根川の流れを銚子に流す「東遷」

が行われ、江戸は水害から守られたが、逆に印旛沼地域の洪水の歴史が始まり、3～4年に1度の洪水により、米が取れない程の過酷な地域になってしまった。このため、印旛沼の洪水を何とか東京湾に流すための水路開削が幾度となく試みられましたが、資金難、難工事等により、何度も挫折したと聞いております。そして、200年後の昭和44年によようやく念願が果たされ、本地域の農業はもとより千葉県の発展に大きな役割を果たすことになったわけです。その間の先人達の苦勞や歴史を忘れずに心に刻み、これからも誇りを持って、次の世代に受け継いでいって欲しい。」との願いを込めて、選定したと記憶しております。



印旛沼疏水を説明する林氏

このため、本情報交換会では、「印旛沼はもちろん、先人の血のにじむような努力によって形成されてきた「疏水」を地域の大切な宝として、これからも誇りを持って守り、次の世代に受け継いでいくためにはどうあるべきか、我々は何をすべきか」などをテーマにお話しを伺っていきたいと考えております。

情報交換会のまとめ

- 女性の参加者が多く、女性は、横や元気な情報、おもしろい情報が多いので学ぶことがある。
- 印旛沼に10年かかっているが、交流会をつくることは非常に重要である。例えば、低地排水路で水質改善をやろうとしたとき、いろいろな方が集まり、お互いの話し合いでできていく雰囲気があったことやいろいろな議論ができて地域を連携させた。
- 行政との連携は、お互いに築き上げていくもので最後までそれを持ち続けること。
- これまでは、行政中心ということであったが、疏水に関しては土地改良区が頑張ってきた。今後は、印旛沼がそれを超えた活動を展開してくための一つの見本になるのではないかと。
- 農地・水・環境保全対策のポイントは、かつては農業施設ということで農家に対する支援だけ考えたが、地域として考えていく。
- 垣根を越えたほうがおもしろいという動きやそういう組織が増えてくれば交流の場にもなる。
- いろんなことを言い合って地域を良くするように自分たちで楽しく動いて、計画をつくると力が入るし、そういう時代が来れば長く続く。
- 印旛沼、そして疏水の環境を非常に良い環境として整備することは、人々に安らかな平穏死を提供してくれるのではないかと。
- 川の福祉と医療と教育の流れの中で、弱者が癒やされる川づくりは一般の人にも好ましいもので癒やしの川として福祉にも役立つような視点を持とう。
- 農業用水路は、更新が中心になってきているので上手に活用をしながら適切な時期に更

新していく。

- 施設は、時々刻々変わって（老朽化して）いるので（更新や改修等の長寿命化）その対策が必要。
- 印旛沼のCO₂の汚染原因は、都市排水で、農業用排水路を經由して印旛沼の汚染をしていることを一般市民に知らしめるべきでは。また、農家の負担についても支援すべきではないか。
- 以前の町村は、農家への支援に理解をいただいたが、町村合併が進み、議会などに事情が伝わらなくなることが心配。お金がどう使われているのか理解していただくことが重要です。また、一般の人が、寄付や負担をするような気持ちがまとまったらすごいことだと思う。
- 外来種雑草「ナガエツルノトカゲ」の駆除は、繁殖力が強く、河川管理者だけでなく改良区などを含めた流域で対応することが必要。
- 印旛沼の汚染の現状には閉鎖性の特徴があり、改善策として印旛沼の水を循環してはとの意見があるが、内部で汚物を再生しているということもあるので、流動化というのは一つの手ですが流動化するのにどういったエネルギーを使うかで、まだ検討中です。やはり流域から出てくるものを押さえることですね。また、植生で押さえようとするとその植物をザリガニが切ってしまうのでザリガニの天敵であるナマズが生息できる水田が必要となる。もう一つの流動化の方法は、利根川の水を入れる方法ですが、現状では、利根川の水質の方が汚いことやナマズを導入するには排水路から水田への魚道を整備する必要がある。
- 課題の解決は、一挙に解決する方法はないと思うが、粘り強く全部の地域でじわーとやっていくこと、そのためには人が非常に大事だと思う。滋賀県では「魚のゆりかご水田」で、そういう取り組みをしていて、琵琶湖と水田を水路や魚道で結び水田を産卵や子育ての場としている。

会場の風景



情報交換会のパネラー



全国農村振興技術連盟
委員長 太田信介氏



印旛沼流域水循環健全化会議
委員長 虫明功臣氏



印旛沼二期農業水利事業
所長 及川和彦氏



環境パートナーシップ
代表 桑波田和子氏



印旛沼土地改良区
理事長 清水豊勝氏

会場出席者との意見交換風景



閉会の挨拶

全国水土里ネット中條康朗専務理事が、ご講演とパネルディスカッションをいただいた皆様と、フォーラム開催にご支援をいただいた皆様に感謝を申し上げ、来年度のフォーラム開催地及び開催時期は、事務局で十分検討した上で報告したい。と締めくくった。



閉会挨拶をする
中條専務理事

現地研修

現地研修は、20日（土）に49名が印旛沼疎水の主要施設である大和田排水機場と印旛沼湖畔の大区画ほ場で行った。大和田排水機場では同機場の役割と上下流の疎水の機能について、また、印旛沼湖畔の大区画ほ場では、ほ場の均平、自動給水栓、地下排水管及び暗渠排水、そして農業機械が農道を利用して旋回する状況について説明を受けた。また、印旛流域の関係者が隣接するほ場で開催していた「環境、体験フェア」も視察した。